



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3 / TEL 045-774-9861洋光台
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / 世話人代表 金子 敬
事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

巻頭言

金沢バプテスト教会牧師

田口昭典
たぐちあきのり

メッセージが波紋のように

3年ぶりに金沢に佐々木和之さんをお迎えし、お働きを通して確実に和解の道が開かれ、実を結んでいることを知り深い感動を味わいました。「あなたの敵を愛しなさい」「迫害する者のために祝福を祈りなさい」という主イエスの教えが実践されている姿に心底感動させられました。正に祈りと愛の奉仕、そして御霊の導きによる奇跡だと思います。

さて、佐々木さんは今回もミッションスクールでお話し下さいました。僅か10分の時間でも佐々木さんは喜んで奉仕されます。3年前、VTRを交えての話は中学生の心に届き、彼らはルワンダのこと、世界の民族紛争、内戦等についてもっと知りたいという思いを与えました。その年、夏休みにも拘わらず、彼らは学習しました。私にもわか仕立ての資料を元に、戦争と平和、世界の内戦の現状とその原因、そこに聖書のメッセージの光を当ててお話しするなど、彼らのサポートをさせて頂きました。彼らは支援する会の事務局から写真パネルを借り、文化祭で展示すると共に、世界の内戦・民族紛争について一教室全部を資料室として、研究を発表したのです。また、男子

生徒を含めて50人の生徒が大きな「平和キルト」を作成し、ルワンダの佐々木さんの元に送りました。今、それはリーチの事務所に飾られ、訪れる人々への良き励ましになっているといえます。

今回、チャペルが終わると、佐々木さんのもとに女子生徒たちがやって来ました。かつてキルトを送った生徒さんたちです。彼女たちは自分たちの作った平和キルトのその後を知り、自分たちのしたことが何かの役に立ったことが嬉しいと言って涙を流し、心に深い喜びを味わいました。

かつて、JOCSの古切手運動に参加した子どもたちの中から、沢山のワーカーが生まれたことを伺ったことがあります。佐々木さんの働きは、ルワンダという中心を持ちながら、そこから発せられるメッセージが波紋のように多くの人々の心に届き、人材育成の役割をも担っているのだと思います。この働きは、気の遠くなるほどのエネルギーを必要としています。しかし、その中から、平和を実現する働き人たちが起こされてくるにちがいません。私は、金沢での小さな出会いの中からは種一粒のいのちを見えています。

佐々木和之

ささきかずゆき

和解への旅路を歩む人々

憎しみからの解放に向けて歩み出すことを主体的に選ぶとき、信仰者には「主よ、あの人をも赦してください」という祈りが生まれるのではないのでしょうか。

日本は秋が深まり、紅葉の美しい季節でしょうか。ルワンダは今、雨期の真っ最中で、「アフリカのスイス」と呼ばれる緑豊かなこの国が、ひととき美しい季節です。今回は嬉しいニュースも含め、盛り沢山の『ウブムエ』をお届けします。

■帰国報告を終えて

8月5日までの約2ヶ月間、とてもハードな日程でしたが、日本での報告会を無事完了してルワンダに帰ってきました。訪れた場所は1都11県、報告・講演・メッセージなどをさせていただいた教会や学校等の数は38箇所、講演回数は何と65回にのぼりました。蒸し暑い日本での「全国巡業」、体力・気力が持つか心配でしたが、何とか燃え尽きずに完了することができました。

第1期の3年間、祈りつつご支援くださった皆さんお一人お一人と出会い、活動の様子について報告できたことを感謝致します。幼稚園から大学生、そして教会の青年会の方々まで、若い世代にルワンダのことを伝え、語り合う機会にも恵まれました。顔と顔を合わせ、言葉を交わした皆さんからの支援、励ましの言葉、お祈りが、現場で働く私たちにとって何よりの支えです。今回の滞在を通し、第2期の働きを進めていくために必要な力を受け取ることができました。ありがとうございました。

日本滞在中の報告の様子や出会いについては、支援会ホームページのブログ、「和之の出会いに乾杯」をご覧ください。

■「償いのプロジェクト」が再開！

既にご存じの方も多いかと思いますが、嬉しいニュースをお伝えします。労働奉仕刑を宣告された虐殺加害者が、セミナー等を通して謝罪の思いを深めつつ、被害者側の家族のために家造りをする「償いのプロジェクト」が、7月中旬に本格的に再開しました。今思えば、一時は中止に追い込まれる可能性もあっただけに、ずいぶん待たされましたが、諦めずに政府側と交渉を続けてきて本当に良かったです。

再開後、136名の受刑者が参加していますが、これまでに4軒を完成し、現在は6軒の建設のために汗を流しています。これらの受刑者は政府が設営したキャンプで寝泊まりし、週6日、朝6時から午後2時までプロジェクトの住居建設に参加します。キレヘ郡にはこのようなキャンプが現在2箇所あり（全国では60箇所）、プロジェクトに参加している受刑者は、そのうちの1つに収容されている約270名の半数にあたる人々です。残りの半数は、主に土壌浸食防止のためのテラス建設に従事しています。顔見知りの受刑者たちの話では、よりやりがいを感じることができる住居建設への参加を希望する人が多いとのことでした。

■NHK BS1でプロジェクトが紹介！

複数の虐殺加害者が協力して被害者側の家族のために家を建てるなど、日本の皆さんには想像しにくいことであろうと思います。加害者たちがどんな表情で作業に取り組んでいるのか？それを見守る

被害者側の家族の表情は？両者の間で言葉が交わされることがあるのか？

プロジェクトによって生まれている被害者と加害者の間の心の交流について、これまでも何度か報告してきましたが、なかなかうまくお伝えできないもどかしさを常々感じてきました。そのプロジェクトの生の様子、人々の表情や心の内を描いたドキュメンタリーが、NHK衛星第1放送の「世界のドキュメンタリー」で11月27日（木）の午後9時10分から放映されることになりました！ タイトルは「償い」への家造り 〜ルワンダ・集団殺戮からの模索〜」です。その週は「和解への苦悩」というシリーズで、他にもパレスチナ、北アイルランド、南アフリカ等での和解への取り組みが紹介されます。

（詳しくは、<http://www.nhk.or.jp/wdoc/votei/index.html>）

このドキュメンタリーは、日本からの製作チームが、約1ヶ月間現場に張り付いて取材・撮影をした労作です。皆様のご支援で進められている修復的正義による和解への取り組みが、このような形で紹介されることをとても嬉しく思います。ぜひご覧いただくとともに、できるだけ多くの方々に番組のことをご紹介ください！



笑顔を見せるプロジェクト参加者たち

■加害者が被害者に会おうとき

このプロジェクトが、大虐殺の当事者た

ちの関係修復に役立つものになるためには、参加する受刑者たちの罪の自覚を深め、心を込めて「償い」としての家造りに取り組むように動機付けをすることが不可欠です。どうしたらそれができるのか？このことについて、現場で働きながら重要だと感じていることを書き留めておきたいと思います。

14年前、多くの一般市民が、権力者の扇動や強制によって殺戮へと駆り立てられていきました。それまで、ツチを徹底的に非人間化するイデオロギーを擦り込まれ、また、体制側に立たなければ、自分が殺されるかもしれないという恐怖心に駆られて、多くの「普通の人々」が残虐行為に手を染めたのでした。そのとき叫ばれたスローガンの1つは、「ゴキブリどもを叩きつぶせ！」だったと言います。人間ではなく、あたかもモノであるかのように山刀で斬りつけたり、強姦した相手が、実は、自分の母、妻、娘、そして自分自身と同じように人格を持った生身の人間であったこと、その時、どんなに痛かったか、怖かったか、悲しかったか、悔しかったかということ想起し、感じ取ることが必要です。そのようにして、「悲しむ力を取り戻す」（野田正彰著『戦争と罪責』）ことが必要なのです。

そのために受刑者のセミナーでやっていることのひとつが、被害者の方々の証言を聴くことです。被害者であれば誰でも良いというわけではありません。REACHは、これまでの活動の中で、恐れ、怒り、憎しみといった感情を克服し、加害者の中にも自分と同じ人間性を見いだすことのできるようになった方々と出会ってきました。その方々の中から、私たちが最も相応しいと判断した方に、よく主旨を理解していただいた上で語ってもらうのです。

新たにプロジェクトに参加する36名の受刑者を対象に、9月中旬に実施したセミナーでは、プロジェクトの受益者である2人の女性がその役割を担ってくれま

した。ステファニアさん（ウブムエ10号で紹介）とアルフォンシンさんです。アルフォンシンさんは大虐殺のとき19歳、両親や兄弟を含む9人の肉親を殺されました。強姦され、体のいたる所を山刀で斬りつけられ、血まみれになりながら生き延びたという彼女は、こちらが耳を塞ぎたくなるような虐殺当時の体験を淡々と一自分が負った傷について語るときには、切れ込みの入った片耳や深くえぐれたすねの傷を指し示しながら一語りました。受刑者たちは、それを息を呑むようにして聴いていました。

彼女は虐殺の後、従兄夫婦の家族と一緒に暮らしているのですが、数年前から仮釈放されたり刑期を終えた加害者がその従兄夫婦のところに謝罪に来ることが度々ありました。彼女はしばらくの間それらの加害者に会うことを拒絶していたものの、彼等と和解した従兄の影響や、REACHのセミナーなどの活動を通して、少しずつ心が和らいでいった経過を説明しました。そして今では、自分を傷つけた人たちを含め、複数の加害者を赦したと語ったのでした。彼女は証言の最後を、「今、皆さんの兄弟が私の家を造ってくれています。皆さんどうもありがとう」と、感謝の言葉で締め括りました。



アルフォンシンさんと受刑者たち

私は、彼女の証言を聴きながら、涙が溢れてくるのをこらえることができませんでした。どん底の苦しみから生還し、癒された彼女が、今、自分を苦しみの淵に突き落とした者たちを前に、静かに、

威厳を持って語りかけているという事実
に圧倒されたのでした。

私がアルフォンシンさんと出会ったのは、昨年春、受益者を招いてプロジェクトの説明会をしたときのことです。そのときの彼女の印象を記したノートには、「表情がこわばり、顔をしかめながら話をする。トラウマの後遺症が残っているように見受けられる．．．」とあります。そのしばらく後、大虐殺の記念週に開かれた集会では、少人数のグループで「心の中の苦しい思いを皆で分かち合しましょう」と勧めを受け、彼女は、「どうしてそんなことをしなくてはならないのか？」と、進行役の牧師に食ってかかったといえます。

私は、この短い間に彼女に起きた変化に正直いって驚いています。その理由を明確に説明するのは不可能ですが、辛抱強く彼女の聞き役に徹してくれたプロジェクト調整員のオーグスティン牧師の存在が大きかったのではないかと見ています。彼女が自分の身に起きた辛い出来事について、初めて打ち明けた相手はオーグスティン牧師でした。彼は、自分から彼女の過去を尋ねることは一切ありませんでした。しかし、なかなか家造りが始まらないことで気を揉む彼女をなだめたり、励ましたりする中で、突然、彼女が自分のことを語り始める瞬間が訪れたということです。初めの頃は自分のことを語る度に取り乱していた彼女ですが、いつからか彼女の顔から涙が消えていたといえます。そして、今回複数の加害者を前に証言した彼女は、静かに、威厳を持って彼等に語りかけたのでした。セミナーの数日後、私はその時の感想を彼女に尋ねました。すると、「それまでいつも重荷を背負っているような感じでした。でも、あのセミナーで、それを下ろすことができました」と話してくれました。

彼女の証言を聴いた受刑者たちはどんな印象を受けたのでしょうか。証言の直後、

数名の受刑者たちが、彼女に向って、これから仕事を始める自分たちのために祈って欲しいと頼んでいました。さらに、セミナーの後も、全員とはいきませんが、真剣に作業に取り組む受刑者たちの姿があります。最近、アルフォンシンさんと一緒に他の受益者の現場を訪ねた時のことです。私は、彼女とにこやかに言葉を交わしていた1人の受刑者に、何を話していたのか尋ねました。すると彼は、「あと1週間で刑期を終えて故郷の村に帰るので、それまでに何としても彼女の家を完成したい。そこで、必要な資材の搬入を済ませるように、REACHに言うておいてくれるように頼んでいたんだ」と答えました。私は、彼の思いやりと誠実な姿勢に心を打たれたのでした。そう語る彼の顔は確かに輝いていました。

■アグネスさんの帰還

ホームページで既にお伝えしたことで、アグネスさんが暴漢に襲われるという衝撃的な事件が起きました。彼女は、REACHの活動を草の根レベルで担ってくださっている虐殺生存者（genocide survivor）で、複数の虐殺加害者を赦し、罪を告白した加害者が被害者側の家族に謝罪しにいくのに付き添ってあげるなど、村の人々の和解のために尽力してきた女性です（ウブムエ6及び11号参照）。

9月9日の夜、アグネスさんの家の裏庭で、ふらっと現れた村の若者が突然隠し持っていた棒で彼女の顔面を殴りつけ逃走しました。ルワンダでは、虐殺加害者の裁判での不利な証言を封じるためと見られる、虐殺生存者の殺害が今でも時折報告されています。ですから、アグネスさんは今回の事件（詳細はホームページを参照）を大虐殺を生き残った自分への攻撃であると受け止め、大きな衝撃を受けたのです。

襲撃のニュースを聞き、キレヘ郡の彼女の自宅を訪ねた私に、彼女は、「どうか祈って欲しい、日本の友人たちにも祈

ってくれるように伝えてください」と涙ながらに訴えました。そこで私は、電子メールやブログを通して、日本の皆さんにそのことを伝えたのでした。その後、友人の竹内緑さん（日本国際飢餓対策機構スタッフ）の協力を得て、アグネスさんにしばらくの間、ある修道院で休養をとってもらいました。そこで緑さんと一緒に心休まる時間を過ごしたことが功を奏し、事件から1ヶ月以上を経た今、彼女はすっかり落ち着きを取り戻し、キレへの自宅で生活しています。

修道院に向う前日、アグネスさんに拙宅に泊ってもらったのですが、翌朝の5時頃、私は、どこからともなく聞こえてくる話し声らしきもので目を覚ましました。しばらくしてそれが、彼女の祈りの声であることが分かりました。祈りの後、賛美の歌声がしばらく続き、再びそれが熱心な祈りに変わりました。その祈りと賛美の繰り返しが40分くらい続いたでしょうか。

私はそれを聞きながら、約10年前にエチオピアの深い谷あいにある教会に泊ったときのことを思い出しました。礼拝堂の裏にある土間の部屋にゴザを敷いて寝かせてもらったのですが、夜の祈り会に集った50名くらいの人々も礼拝堂にゴザを敷いて泊まっていました。険しい谷あいの道を長時間かけて教会にやってくるので、夜の祈り会があるときにはいつも泊まりがけだということでした。

翌日の夜明け前のこと、礼拝堂の方から祈りの声が聞こえてきました。そこに泊まった人々が壁に向かってひざまずき、口々に祈りの言葉を唱えていたのです。そのとき私が見たものは、それまで私が考えていた「祈り」と言うよりは、「うめき」や「叫び」と言った方がふさわしいものでした。それぞれが思い思いに神様の前で呻き、また、叫びを上げ、その後立ち上がって、まだ薄暗い朝もやの中を帰っていったのでした。

アグネスさんの早朝の祈りを聞き、私

は、あの谷あいの教会で目撃した、祈りの原点ともいえるようなものを感じました。それは、信徒として「祈らねば」といった義務感のようなものとは無縁の、祈ることによって生きる力を得ている人々の祈りと言ったらいいのでしょうか。朝まだ目覚めるか目覚めないかの時に、ひざまずいて祈り始めることによって初めて立ち上ることができる、そして、今日を歩み出すことができる…アグネスさんは、そんな祈りをされていたのだと思うのです。

動揺の激しかったアグネスさんを癒し、再び和解の働き人として立ち上がらせたのは、祈りと聖書の言葉でした。特に、「支援する会」世話人会代表の金子敬牧師が贈ってくださった聖書の以下の言葉が彼女を励まし支えました。

神の人の召使いが朝早く起きて外に出てみると、軍馬や戦車を持った軍隊が町を包囲していた。従者は言った。「ああ、ご主人よ、どうすればいいのですか。」するとエリシャは、「恐れてはならない。わたしたちと共にいる者の方が、彼らと共にいる者より多い」と言って、主に祈り、「主よ、彼の目を開いて見えるようにしてください」と願った。主が従者の目を開かれたので、彼は火の馬と戦車がエリシャを囲んで山に満ちているのを見た。

(旧約聖書 列王記下6章15～17節)

この聖書の箇所から受けた大きな励ましについて、彼女は後にこう語りました。「このみことばをいただき、私は、神様の軍隊に守られていることに気付きました。事実、その通りのことを体験してきたのです。この間、私を支えてきてくれた全ての人たち—カズの家族、REACHのスタッフ、地元の牧師たち、ミドリ、そして、私のために祈り、励ましのメッセージを送ってくれた人々—こんなにも大勢の人たちに私は囲まれているのですから…」

アグネスさんは、この聖書の箇所を更

に自分で読み進めました。そして、イスラエルの王がアラム軍の捕虜のために大宴会を催し、彼らの国に返してやったという箇所(22～23節)から、善によって悪に打ち勝つことが神様に従う者たちが取るべき行動であり、そのような者たちを神様は必ず守ってくださる、という神様からのメッセージを読み取ったといます。「アラムの部隊は二度とイスラエルの地に来なかった(23節)」。危害を加える者が自分の所に2度と戻って来ないという神様の言葉、それは、この試練の時に彼女が最も必要としていた言葉であったに違いありません。

最後に、アグネスさんが金子牧師に書き送った手紙の一部を、お二人の承諾のもとに引用させていただきます。

「私は、家族を殺し、私を強姦した人たちをも赦します。なぜなら、そのことによってしか、私の魂と彼らの魂を救うことはできないからです。私はこの世にあるかぎり、十字架を背負っておられるイエス様にお仕えしなければなりません。」

アグネスさんはこうして、信仰によって危機を乗り越えました。必要なもの一切を備え、彼女を再び立ち上がらせてくださった神様、彼女に深く共感し、大切な時間を献げてくださった竹内緑さん、そして、2週間以上に渡って祈り続けてくださった方々に感謝いたします。皆さんのお祈りと、お励ましの言葉は、確かにアグネスさんに届き、彼女を支え続けました。

アグネスさんと恵



■和解への旅路を歩む人々

自分を斬りつけたり、強姦したり、肉親を殺した者たちを赦すというアルフォンシンさんとアグネスさん。これら2人の女性の言葉をどう受けとめたら良いのでしょうか。私は以前、赦しは義務ではなく神様から与えられる恵みだと書きました（ウブムエ5号4頁）。それは、人間が自分の力で成し遂げ得るようなものではないと思うからです。さらに私は、これら2人の女性たちのように、加害者を赦したという人々のことを、恵みとしての赦しを神様から受け取った人たちであり、それを加害者に贈り物として与えた人たちだとも書きました。それは何も、私たちとはかけ離れた「特別な人」という意味ではありません。赦しという神様の恵みを受け取るかどうかは、（さらに言えば、それを加害者に与えるかどうかは、）被害者ひとり一人に委ねられた自由です。それを受け取ろうと決断するとき、すなわち、憎しみからの解放に向けて歩み出すことを主体的に選び取るとき、信仰者には「主よ、あの人をも赦してください」という祈りが生まれるのではないのでしょうか。そして、その祈りの中で、やがて「私もあの人を赦すことができますように助けてください」という祈りが与えられ得るのだと思うのです。アルフォンシンさんとアグネスさんは、このような厳しい、赦しと和解への旅を歩んでおられる方なのではないのでしょうか。

(10月15日記)



萌の旅立ちの朝に

家族の近況

萌：9月からケニアの寄宿学校に進学
勉強と部活に充実した毎日です。

仁：通学前、朝5時起きで友だちとブ
レイするほどテニスにはまっています。

共喜：学校のスピーチのテストで99点
を取り、ますます張り切っています。

恵：今回、ウブムエの紙面を和之に奪
われたので、その分、ブログへの
投稿に励もうと思っています。

和之：ブログの更新、10日に1度を目
標に頑張っています。

<家族を覚えてのご加禱よろしくお願
い致します。 >

事務局からお知らせ

- 佐々木夫妻のブログを含め、支援会ホームページ (<http://rwanda-wakai.net/>) を適時更新しています。ご覧ください！
- REACHが支援する若者たちが結成したウルムリ・ルブムエ合唱団のCD、「我らはひとつ」の販売を開始しました。収益金は、青少年のスポーツ・文



化交流によるルワンダの平和構築のために用いられます。バプテスト連盟宣教部・国外伝道室が窓口を担ってくださいます。

お問い合わせは、宣教部 国外伝道室 丁野雅子さんまで。

電話：048-883-1091 電子メール：chouno@bapren.jp

- 佐々木さんが取り組んでおられる、「償いのプロジェクト」がテレビで紹介されることになりました。番組の詳細は以下の通りです。ぜひご覧いただくとともに、友人・知人の皆さまにご紹介ください！

NHK衛星第一放送 (BS1)
BS世界のドキュメンタリー <シリーズ 和解への苦悩>
"償い"への家造り～ルワンダ・集団 殺戮からの模索～
11月27日(木)午後9:10 - 10:00
詳しくは <http://www.nhk.or.jp/wdoc/yotei/index.html> をご覧ください。

新たに支援をくださった方々です。感謝致します。

('08年1月16日～'08年10月)

武本民子、中上禮子、学校法人ヨハネ学園(福島様)、川和まゆみ、佐々木功悦・貴子、井浦 緑、草野秀子、田島慶康・由利、田島 光、関内美津子、大久保くるみ、志賀福子、尾崎 睦、原口徹・悦子・建、江田初穂、井形英絵、土屋敏幸、田代秀武、加藤節子、西田益枝、秋山義也、牧浦博國、手塚栄子、北原末男・淳子、大谷凱基、小野山まゆみ、柴田久子、木村誠一郎、松久洋子、川口一枝・有田禮子・栗山高子、バプテスト北九州地方連合青年会、森川邦子、瀬戸素子、高嶋敦子、せきねかずま、徳永香代子、草場久子、関東学院小学校3年a組、平出朋哉、根本望・伴子、田中愛子、岩切成人、朝原裕子、佐々木京子、桐島清吾・久子、長尾優、中川春野・英明、渡辺真知子、吹抜悠子、松浦順子、岡本吉正、山本 忍、市川陽子、杉野省治、大成弘子、林 幸子、内田和仁、作田和子、高島志保、石原由紀、斎藤操子、須藤啓子、岩原晴江、草光澄子、川上利子、川島結実、グリーク・フラッシュ、昆野喜根子、対田順明・澄子、由田美津子、宮下信一、関東地区報告会カンパ、石川光一、鹿島栄司・美和子、川口浩一郎、荒川美智子、堀 史子、舛田栄一・信子、岡崎美奈子、菅原元子、日本バプテスト同盟関東部会社会委員会「平和の集い」、染森哲朗、林郁子、横井智子、京野楽弥子、西九州霊交会、北九州女性連合、長崎バプテスト教会、福岡地区報告会、熊本諸教会、宮崎地区報告会、金沢教会、相模中央教会、浦和教会女性会、元澤美香、株式会社婦人之友社、釘宮美代子、濱池寿賀子

以上(受付日付順順)

事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会

佐々木さんを支援する会HP (ホームページ)

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。

HPから入会手続きも可能です。

佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

世話人会 金子 敬(古賀教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、
村上千代(日本バプテスト女性連合幹事)、吉高 叶(栗ヶ沢教会牧師)